

「底が突き抜けた」時代の歩き方

339

突然拉致されるという悪夢と不条理な出来事

誰かがヨーゼフ・Kを誹謗したにちがいがなかった。なぜなら、何もわるいことをしなかったのに、或る朝、逮捕されたからである。という書き出しで、カフカの『審判』（新潮社版）は始まり、次のようなやりとりが続く。Kが逮捕の理由を尋ねると、見知らぬ男たちの一人は「君にそんなことを言うように言いつかっちゃいない。部屋に入って、待っていたまえ。訴訟手続はもう始まったんだから、時が来れば万事分るようになるだろう。君にこんなに親切に話すことは命令の範囲を出ているんだ。けれど、おそらくフランス以外に聞いている者は誰もいないだろうし、あれからして規則に違反して君に親切なんだからね。これからさきも、君の監視者が決まったときのように幸運に恵まれるなら、安心できるわけだよ。」と返答する。

一体此奴は何者だろう？ 何を喋っているのだろう？ どんな役所の者なのだろう？

俺は法治国に住んでいるのだし、国じゅうに平和が支配しているし、すべての法律は厳として存在しているのに、何者が俺の住居において俺を襲うということを敢えてしたのだろうか？ と考えながら、自分の30歳の誕生日に 銀行の同僚が計画した性のよくない悪戯と見做したり、冗談か 喜劇ならば、自分も一緒になってやってやろうと考えて、身分証明書を見せて、「今度はあなたがたのを見せて下さい、それに何よりもまず逮捕状をね。」という、「そんなものがなんだというんだ」と、大男の監視人がすぐさま叫んだ。「子供より行儀がわるいぞ。一体どうしようっていうんだ？ われわれ監視人と身分証明書だとか逮捕状だとかのことで議論すれば、君の大変な、厄介極まる訴訟がたちまち片づくとも思っているのか？ われわれは下っ端なんで、身分証明書なんか知ったことじゃないし、君を毎日10時間ずつ見張ってその報酬を貰うということ以外、何も君とは関係がないんだからね。これが俺たちの身分に関するすべてだ。それでも俺たちには、俺たちが仕えている偉い役所は、こんな逮捕をやる前には、逮捕の事由や逮捕人の身柄を非常に詳しく調べ上げている、ということは分るんだ。それに誤りなんかありゃしない。われわれの役所は、俺の知る限りでは、もっとも俺は一番下の連中だけしか知らないが、何か住民のうちに罪を探すんじゃなくて、法律にもあるとおり、罪のほうに引きつけられ、そして俺たち監視人を寄せさざるを得ないんだ。それが法律というもんだ。何処に誤りがあるんだ？」

上等の黒の背広に着換えさせられたKは、監督が坐っている部屋に呼び出され、冗談にしては大げさすぎる 今日 の出来事 について訴える。

「しかし一面、この事件は大して重要性を持ってはいません。そう推論できるのは、

私は告発されてはいるものの、私が告発されるような罪は、少しも見つけ出せないからです。しかし、それも二の次です。問題は、誰に告発されたのか、ということです。どの役所が手続をやっているのか？ あなたがたは役人なのか？ どなたも制服は着ておられないし、あなたがたの服は」 - ここで彼はフ란ツのほうを向いた - 「制服とは申せませんからね。どうみても、むしろ旅行服といったものです。こうした疑問に明瞭なご返事を願いたいと思います。これがはっきりすれば、お互いに極めて気持よくお別れできる、と確信します。」

監督はマッチ箱を机の上に置いて、言った。

「君は大変間違っている。此处におられる方々も私も、君の事件については全く枝葉の存在なんだ。実のところ、それについてはほとんど何ひとつ知ってはいやしない。われわれは規則どりの制服を着ることもできようが、それで君の事件がどうなるというものじゃない。君が告発されているなどということは、私は全く言えないし、或いはむしろ、一体君が告発されているのかどうかさえ、知ってはいないのだ。君が逮捕された、ということは確かだ。それ以上は知ったことじゃない。おそらく監視人たちが何か余計なことを喋ったかもしれないが、それならそれはただのお喋りだ。君の質問にはお答えしないが、われわれのことや、君にこれから起るかもしれないことやにはあまり頭を使わないで、それよりか君自身のことを考えるほうがよい、と忠告しよう。自分は潔白だという気持でこんな騒ぎをやらないことだな。君がほかのことでは与えているさしてわるからぬ印象を、ぶち壊してしまうからね。それにまた、およそ口をもっと慎むことだ。君がこれまで喋ったことはほとんどみな、ただほんの二こと三ことに止めておいても、君の態度からして分かったことだろうし、その上、君にとって格別有利なものでもなかったからね。」

Kは理不尽な、一向に姿を現さない権力にむかって自分を主張し、自己の内面を守ろうとして徹底的に抗戦した挙げ句の果てに殺されてしまう。その最後の場面の描写はこうである。完全に身のあかしを立てることはできず、役所からあらゆる仕事を取り除くこともできなかったが、この最後の失策に対する責任は、それに必要な力の残りを俺から拒んだ奴が負うのだ。彼の眼差しは石切場に接した家の一番上の階に注がれた。明りが点くと、ひとつの窓の扉が開き、遙かに高いところにいるので弱々しく、痩せて見える一人の男が、ぐっと前に身体を乗り出し、腕をいっそう広く広げた。一体誰だ？ 友人か？ いい人間か？ 関係している人間か？ 助けてくれようとする者か？ 一人だけなのだろうか？ 沢山の人間がいるのだろうか？ まだ助かる見込みはあるのか？ 忘れられていた異議があるのか？ きっとそんな異議があるはずだ。論理は揺がし難いが、生きようと欲する人間には、その論理も対抗することはできない。俺が見なかった裁判官は何処にいるんだ？ 俺が其処までは行きつかなかった上級裁判所は何処にあるのだ？ 彼は両手を挙げ、指をことごとく広げた。

しかし、Kの喉には一人の男の両手が置かれ、もう一方の男のほうは小刀を彼の心臓

深く突き刺し、二度其処を抉った。見えなくなってゆく眼で、Kはなおも、二人の男が頬と頬とを寄せ合って自分の顔の前で決着を眺めている有様を見た。

「まるで犬だ！」と、彼は言ったが、恥辱が生き残ってゆくように思われた。

この『審判』はフランツ・カフカ（1883 - 1924）が31歳の時に書き始められ、死後の翌25年に出版された。その十数年後にナチス・ドイツが台頭してくるのを考えると、もしプラハ生まれのユダヤ人の彼が生きていたなら、どのような運命に遭遇することになったかは想像するまでもない。だが彼は生存中に、自分の生きている時代がナチス・ドイツ的な《自分が自分でありうる》不安に突入しつつある空気を感じ取っていた。『審判』のKは訳も分からずに逮捕されることになったが、なにか罪を犯したことによって逮捕されたのではなく、逮捕されたということ自体が罪となりうるような時代の到来であった。罪があろうがなかろうが、人が突然逮捕されるという状況はKのように、なぜ自分が逮捕されなくてはならないのかを自問しつづけ、雲を掴むような権力に徹底的に抗戦していくことが新たな罪を積算するように進行していく。

ナチス・ドイツによって逮捕され、強制収容所へと送られたユダヤ人はなにか罪を犯していたわけでもなければ、社会的な陰謀を企んでいたわけでもなかった。ナチスにとってはユダヤ人であること自体が罪に値した。つまり、ユダヤ人として生まれてきたことが、ユダヤ人として存在していることが、罪そのものにほかならなかったから、その罪をなくすためにはこの地上からユダヤ人を殲滅する以外になかった。なぜドイツ人にとって、ユダヤ人であることは罪であったのか。なぜドイツ人にとって、ユダヤ人以外の他の民族、たとえばイギリス人やフランス人……であることは罪に値しなかったのか。イギリス人やフランス人であることが罪として意識されるほど、除去しなくてはならないとまで思い詰めるほど、彼らがドイツ人に入り込んでくることはなかったからだ。要するに、彼らは自分とはっきりと区別される他人にほかならなかった。だが、ユダヤ人はドイツ人にとってそうではなかった。

ドイツ人にとってユダヤ人は、この地上から消滅しなければならぬほどの存在にまで食い込んでいたのである。ドイツ人がドイツ人であるためには、ユダヤ人は存在してはならなかったのだ。ドイツ人がドイツ人であることを阻害しているユダヤ人を除去しなければならぬという考えは、ユダヤ人を一掃することがドイツ人として存在しうる最大の根拠であるという考えへとたやすく引っくり返っていく。いうまでもなくドイツ人がドイツ人として存在しようとするように、ユダヤ人もまたユダヤ人として存在しようとする。しかし、ドイツ人がドイツ人であるためにはユダヤ人は消滅しなければならぬとドイツ人が考えたとしても、ユダヤ人のほうはユダヤ人であるためにはドイツ人は消滅しなければならぬと考えているわけではなかった。

おそらくドイツ人はユダヤ人が自分たちと異なる存在であるから憎悪したのではなく、自分たちとほとんど同化しているから憎悪したのである。ユダヤ人に映しだされている自分たちを嫌って、ドイツ人は自分たちを映しだすユダヤ人そのものを抹殺しようとし

たのだ。だが、ユダヤ人はドイツ人に映しだされている自分たちを拒みはしなかった筈だ。むしろユダヤ人は進んでドイツ人に映しだされている自分たちを受け入れようとしていたかもしれない。ドイツ人にとっては、そのようなユダヤ人がますます嫌になっていったと考えられる。カフカには、ある朝目覚めると「毒虫」に変わっていた、という有名な冒頭から始まる、『審判』の翌年に発表された『変身』という小説があるが、ユダヤ人がある朝目覚めると、ドイツ人の目にユダヤ人は「毒虫」に変わっていたと読んでいくと、『変身』という寓話も非常に暗示的ですからあるのがわかる。

ユダヤ人がドイツ人の目に「毒虫」や「害虫」としてしか映らなくなったとき、ホロコーストが不可避になったのであり、ユダヤ人はもはやドイツ人によって「害虫」とみなされる存在でしかなくなってしまったのだ。カフカの予見はユダヤ人に対するナチス・ドイツのまなざしの枠組みに収まるものではない。ドイツ人によってユダヤ人が「害虫」とみなされて駆除されていく時代の到来は、もはやユダヤ人かどうにかかわらず、ある任意の人間が突然「害虫」として逮捕され、強制収容所へ放り込まれていくスターリニズム体制をその背後に控え目に用意した。スターリニズム体制が収容所群島にほかならないことを、総計227名の体験者によって記録したソルジェニーツィンの『収容所群島』（新潮社）の第一部牢獄産業の第1章もまた、『審判』と同様に「逮捕」で始まる。『審判』の主人公Kはユダヤ人であることによってナチス・ドイツに逮捕され、30年代後半には700万人のK（そのうち100万人が処刑）という記号的な存在として収容所群島へと送られていく運命を見通しているといえる。

この不可思議な《群島》へはどうやって行くのか？ そこへは絶え間なく飛行機が飛び、汽船がかよい、列車が轟音をひびかせて走っていく。だが、飛行機にも、汽船にも、列車にも行き先の表示はいっさいない。出札係も、ソ連人の旅行を斡旋するソフツーリストや外人旅行者の世話をやくインツーリストの係員も、もしあなたがそこへ行く切符がほしいと言ったら、それこそびっくり仰天するだろう。《群島》全体はもちろん、その無数の島々の一つとして彼らは知らないし、聞いたこともないからである。

《群島》の管理に行く者は - 内務省の学校を経てそこへ行く。

《群島》の警備に行く者は - 軍事委員会を経て招集される。

そして私やあなたのようにそこへ死にに行く者は、必ず一つの関門を通らねばならない。それは逮捕である。

逮捕!! それはあなたの生活全体の急転回とでも言えようか？ あなたへの落雷とでも言えようか？ 耐えがたい精神的ショックとでも言えようか？ これには誰でも慣れることができるとはかぎらず、気が狂ってしまうことも決して稀ではない。

この宇宙にはそこに住む生き物と同じ数だけの中心がある。私たちはそれぞれ互いに宇宙の中心であるが、「あなたは逮捕された！」と、しわがれ顔で言われたとき、その宇宙は木端微塵に砕けてしまう。

あなたは逮捕された、と言われた場合、いったいこの激震に小ゆるぎもしなかったよ

うな者があるだろうか？

私たちは茫然自失して、この天変地異を理解することができず、敏感な人も鈍感な人も、その瞬間これまでの人生経験を総動員して、ただ咽喉の奥から搾り出すようにしてこうたずねるのが精いっぱいなのである。

「私が?? なんのために?!?」

これはこれまでに何百万何千万回と繰り返され、しかも一度として返答を貰ったことのない問いかけである。

逮捕 - それは突如として一つの状態から別の状態へあっという間もなく放り込まれることである。

私たちは曲りくねった長い人生行路を仕合せに、あるいは不仕合せに歩みながら、腐りかけた板塀も土塀も煉瓦塀もコンクリート塀も鉄の塀も、とにかく、さまざまな塀を、横目に眺めてきた。これまで私たちはそれらの塀の陰に何があるのか考えようとしなかった。私たちは塀の中を覗き込もうとしなかったし、そこがどんな所か知ろうとしなかった。ところが《収容所》という国はそこから、私たちのすぐ近く、2メートルと離れていない所から始まっているのである。さらにまた私たちは、数えきれないほどたくさんの小さな扉がうまくカモフラージュされて、これらの塀にきちっとはめこまれていることにも気づかなかった。こうした小さな扉は、すべて私たちのために用意されているのである！ その扉の一つがやがてさっと開き、労働には不慣れだが実にすばしこくたくましい4本の白い男の手が、私たちの足を、腕を、襟を、帽子を、耳をつかまえ、俵でも引きずり込むように、私たちを引きずり込むと、私たちの背後の扉を、私たちの過去の生活とつながっているその扉を、ぱたんと永久に閉めてしまうのである。

万事休す。あなたは逮捕されてしまったのである！

そしてあなたは子羊のような弱々しい声でこう訴えるほか、それに応える言葉を何ひとつ思いつかないのだ。

「私が?? なんのために??」

いや、これが逮捕というもののなのである。それは目もくらむばかりの稲妻と落雷であり、その瞬間から現在たちはたちまち過去に变じ、まったくあり得ないことがれっきとした本当のことになるのである。

いや、それだけのことである。もはやあなたは逮捕直後の一時間はおろか、一昼夜経っても、それ以上のことは何ひとつ理解することはできないのだ。

そのとき絶望に陥ったあなたの脳裡に、サーカス小屋のおもちゃの月のように、こんな思いがひらめく。

《これはきっと何かの間違いだ！ よく調べてみればわかることだ！》

もう今や逮捕というものの伝統的観念、いや、文学的観念とさえなったそのあとのことは、もはやあなたの混乱した記憶の中にはなく、あなたの家族や隣人たちの記憶の中に一切合財たくわえられているのである。

それは - 夜間鋭くひびく呼び鈴であり、あるいは荒々しくドアをノックする音である。それは - 靴の泥も落さず、ずかずかと踏み込んでくる秘密警察の係官たちである。それは - 係官たちの背後におびえた顔で立ちすくんでいる立会人である（この立会人は何のためだろう？ そんなことは犠牲者たちは考える余裕もないし、係官たちも憶えてなぞいないが、とにかく指令でそう決められており、立会人は一晩じゅうその場において、朝方になると書類に署名しなくてはならない。寢床から無理矢理叩きおこされる立会人にとっても、夜な夜な自分の隣人や知人の逮捕の手伝いに行くなどというのは、やはり苦痛である）。

逮捕は、命ぜられた家宅搜索の重要性の度合いで、押収物の目録作成や部屋または家屋の封印を行う必要があるかどうか、夫について妻も逮捕し、子供も孤児収容所にする必要があるかどうか、残りの家族全員を流刑にする必要があるかどうか、あるいはさらに老人まで収容所に送る必要があるかどうかで区別される。

いやいや、逮捕の形態はきわめて多種多様なのである。ハンガリー婦人イルマ・メンデリは、1926年のある日、コミンテルンでボリショイ劇場の最前列の切符を二枚手に入れた。彼女は取調官のクレーグリがふだんから優しくしてくれるのでいっしょに劇場へ誘った。二人はたいそう仲むつまじく出し物を観たが、そのあと彼は彼女をまっすぐ……ルビャンカへ連行してしまった。1927年6月の花かおるある日、クズネツキー・モストで、スーツ用に青い布地を買ったばかりの、ブロードで丸顔の美人アンナ・スクリプニコワを、一人のしゃれた青年が馬車に乗せた（馭者はとうに察しをつけ、しぶい顔をしていた。おかみが車代を払ってくれるはずがないからだ）。これはもちろんランデヴーではなく、やはり逮捕であった。二人を乗せた辻馬車はすぐさマルビャンカの方へ曲り、黒々と口をあけている門の中へ吸い込まれていった。さらに、それから22年経って、白い夏服姿の海軍中佐ボリス・ブルコフスキーは、高価なオーデコロンの匂いをぶんぶんさせながら、若いご婦人に贈ろうとケーキを買った。だが、そのケーキは当のご婦人の手には渡らず、搜索官たちのナイフで切り刻まれ、中佐が自分の手で独房へ運ぶことになろうとは神のみぞ知るところである。（中略）

吹き荒れる逮捕の嵐に生きた心地もなく、そのうえもうすでに一週間も上司の上目使いの視線を浴びてすっかりしょげきっているある名もない男が、突然、地方委員会へ呼び出され、そこで笑顔の職員からソチの保養所のクーポン券を進呈される。おとなしいウサギは感涙にむせんで、俺の心配は杞憂にすぎなかったんだ、とホッとす。彼はお礼を言い、喜びに顔を輝かせながら荷物をトランクに詰めるためにわが家へとんで帰る。列車の時間まであと二時間。彼はのろのろしている細君を怒鳴りつける。やっと駅だ！

まだ時間がある。待合室かビールのスタンドで、とても感じのいい若い男に声をかけられる。「おや、私のことがわかりませんか。ピョートル・イワーヌイチ？」ピョートル・イワーヌイチはどぎまぎする。「なにかお人違いでは……」若い男は愛想のいい笑いを顔いっぱいにつける。「いや、もちろん、私はあなたに思い出させてあげますとも

……」そう言って、ピョートル・イワーヌイチの細君に恭しく頭をさげる。「すみませんが、ご主人を一分ほどお借りしたいのですが……」細君がよろしいですよと言うと、見知らぬ男はさも親しげにピョートル・イワーヌイチの腕をとって連れていってしまう - 永久に、あるいは10年間も！

駅には大勢の人間が行き交っているが、それにはまるで気づかない……旅行のお好きなみなさん！ どの駅にも国家保安部の支所といくつかの獄房のあることを、どうぞお忘れなく。

もちろん、どんな機械も一回にこなせる分量は決っており、それ以上は無理である。1945年から46年にかけて、ヨーロッパから列車が次々とひっきりなしに到着し、それらを全部いっぺんに呑み込んで《収容所》へ送らねばならなかったころには、逮捕にはもうあの余計な遊びはなく、理論そのものもかなり色あせ、宗教儀式的な羽根はすっかり抜け落ち、何万人という逮捕が点呼だけでおしまいといったお粗末なものとなっていた。係官が名簿を持って立ち、一方の列車から呼び出してもう一方の列車に押し込め、それで逮捕はすべて完了、というわけであった。

数十年来のわが国の政治犯逮捕は、何の罪科もない人びと、したがって抵抗の構えなぞまるでない人びとがつかまる、というのがその特徴であった。だから人びとにはもう駄目だというあきらめの気持が、国家保安部や内務人民委員部の手から逃げおおせるのは不可能だという観念がつくられていった（…）。したがって、逮捕の嵐たけなわのころ、夕方帰ってこられるかどうかもあやしいため、人びとが毎朝仕事に出かけるとき家族に別れの言葉を言っていたころでさえ - あのころでさえ人びとはほとんど逃亡を試みなかった（人びとがみずから命を絶つ例は稀であった）。いや、そうこなくてはならなかったのである。おとなしい子羊が狼には好餌なのだ。

これはまた逮捕の嵐のからくりを知らなかったところからもきていた。どの人間を逮捕し、どの人間には手を触れないかの選択の深い根拠が機関にない場合が往々にしてあったし、機関の目ざすところとはもっぱら目標数字の達成だったからである。数字の達成はきちんとした方針にそったものであるかもしれないが、またまったく偶然的性格を帯びたものであるかもしれなかった。1937年、ノヴォチェルカスク内務人民委員部の待合室の受付に一人の婦人がやってきた。逮捕された隣人が残っていた乳飲み子をどうしたものか相談にきたのである。「お坐り下さい。何とか考えましょう」と婦人は言われた。彼女は二時間ほど坐って待っていたが、そのあと待合室からまっすぐ監房へぶち込まれた。目標数字は急遽達成せねばならず、町の方々へ派遣する係官も足りなくて困っていたところへ、この婦人は自分からとび込んできてくれたのだ！

また、目ざす逮捕の相手がいらない場合、内務人民委員部はその親族から彼を逃亡させないという誓約書を取り立てたが、万一逃亡した場合にはその身代りにあとに残った人びとに対して事件をでっちあげるのは朝飯前だったという 事実もあり、「逮捕の形態はきわめて多種多様」であったのに、人々は一様に抵抗しなかった。

誰もが潔白ならば、誰もが平然とかまえているのは当然である。自分はつかまるまい、何事もなくすむだろう、と考えるからだ。(…) 大多数の人びとはかすかな希望に支えられて、じっとしている。潔白であるなら、いったいなんで逮捕されることがあろう？

これは何かの間違いだ！ もう襟がみをとられて引きずられているのに、人はまだ心の中で呪いを唱えている。《これは何かの間違いだ！ 調べて間違いとわかれば - 釈放してくれるにちがいない！》

それならばどうして逃げる必要がある？ それならばどうして抵抗などしてよかろう？ かえて自分の立場を不利にし、間違いの究明を妨げるばかりではないか。抵抗するどころか、あなたは隣人に悟られないよう、命じられたとおり爪先立って、そっと階段を降りていくことになる。

ではその後 - いったい何に抵抗しようというのか？ バンドを取り上げられたことにか？ それとも部屋の隅に行っておとなしく立っているとされたことにか？ それともわが家の敷居をまたいで外へ出るとされたことにか？ 逮捕というものはたくさんの一見くだらない些事から成り立っていて、その一つ一つをとれば、どれも言い争いの種となるほど重要なことではないみたいだが(なにしろ、逮捕された者の思いは《なんのために?!》という大問題のまわりを堂々巡りしている時なのだから) そうした些事が全部一つにあわされば、それがもう必然的に逮捕という代物なのである。

「抵抗をしなくてはいけなかったんですよ！」今や、無事だった人びとは、逮捕された人びとを責め立てている。

たしかに、抵抗は、逮捕そのものの時点から始まらなくてはいけなかったのである。

だが、それは始まらなかったのだ。

「これは何かの間違いだ！」と思っていれば、『審判』のKのように徹底的に抗戦することが考えられるし、あるいは《収容所群島》の住人のように釈放してくれるまでおとなしく待っていようという手も考えられる。Kの場合は抗戦すればするほど罪が加算されて殺されることになり、群島の住民の場合はウサギのようにおとなしくしていればいほど、釈放は遠のいた。なるほどKがおとなしければ釈放に時間がかからなかったかもしれないし、住人が抵抗していれば面倒な逮捕を当局は諦めていたかもしれない。だがそれはすべて事後の判断であって、逮捕の渦中では人は抵抗するか、おとなしくするか、即座に二者択一を自分に迫らなくてはならないのだ。どちらが得策か！ 何の根拠もないまま、そうしたほうがよいだろうという途を選びとるしかないのである。

最大の問題は、自分がなぜ逮捕されたのか、「逮捕の嵐のからくりを知らなかったところ」にあった。「どの人間を逮捕し、どの人間には手を触れないかの選択の深い根拠が機関にない場合が往々にしてあったし、機関の目ざすところはおそらく目標数字の達成だった」などという好い加減さを、逮捕によって自分のこれからの人生の予定を突如狂わされてしまった人々がどうして信じることができるだろう。目の前を歩いていたから、お前が逮捕されることになったんだなどという馬鹿げた冗談を誰が本気にできるだ

ろう。もちろん、「目標数字の達成」に励む職員からすれば、どこからか員数を調達することは酔っ払いたくなるほど、大真面目な仕事であった。

ナチス・ドイツでは、自分がなぜ逮捕されるのかという問いへの答えは、お前がユダヤ人であるからだ。スターリン体制では、逮捕されるのはもう誰でもよくなっていた。しかし、罪条だけは反体制分子と明白であった。敵として逮捕されるのだ。どのような反体制分子であるかということはどうでもよかった。逮捕されることが敵であり、敵として逮捕されるなら反体制分子以外のなにものでもない、という循環論法であった。つまり、逮捕はノルマであったから、任意の人がその対象であった。このからくりがわかっていたなら、人々は自分がなぜ逮捕されたのかという深刻な問いの堂々巡りから最初から解放された筈である。

ナチス・ドイツにとってはユダヤ人が不安の根源であったように、スターリン体制にとっては国民そのものが不安の根源であった。国民の理想を裏切ったスターリン体制は、国民からの裏切りをたえず恐れていたのだ。だから国民からの裏切りを阻止するために、自分の手で国民の中に反体制分子を作りだす必要があった。誰でも反体制分子として逮捕される状況が作りだされるということは、国民全員が反体制分子にほかならないということであった。ナチス体制下のドイツ人は自分に対する不安の表現をユダヤ人に指し向けたのに対して、スターリン体制下では自分に対する不安の表現を国民自身に差し向けたのである。スターリン体制とは国民が国民自らを逮捕する体制にほかならなかった。

《収容所群島》とは目指す理想社会とは逆向きに進んでいく全体主義国家体制の必然的な形態にほかならなかった。

さて、南北分割占領のどさくさにソ連に担ぎ出されて急遽作られた「金日成将軍」の北朝鮮もまた、紛れもなくスターリニズム国家の嫡子であり、ヒトラーやスターリン、毛沢東などの独裁体制を集大成し、35年間の日本統治時代に押し付けられた天皇制のありかたを加味して独特の全体主義国家を完成させた。その北朝鮮が日本人（や韓国人）を多数拉致していることが判明した。そのうち5人が10月15日に一時帰国した。地村保志さん（23＝当時＝以下同じ）と浜本富貴恵さん（23）、蓮池薫さん（20）と奥土祐木子さん（22）、曾我ひとみさん（19）であり、他の判明している8人の拉致被害者は北朝鮮当局によって「死亡」と説明されているが、不自然な点が少なくない。先の5人は78年（昭和53年）に福井、新潟、佐渡島で、更に「死亡」と伝えられた鹿児島県の市川修一さん（23）と増元るみ子さん（24）、幸い未遂に終わった富山県のカップルを加えると、同じ夏に手当たり次第に拉致されている。

北朝鮮の工作員の手口は、人通りのない海岸近くを歩いている日本人のカップルをいきなり襲って、袋をかぶせ舟に乗せるといったものである。そこには当然ながら「逮捕」という言葉は一切ない。日本から北朝鮮への拉致であり誘拐であるから、自分はなぜ逮捕されたのかとしきりに考えこむ代わりに、自分はいまどんな目に遭っているのかを底なしの不安と恐怖に打ちふるえながら、袋の中でじっと耐えているだけであった。彼らが

拉致されて舟で訳の分からぬどこかへ連れ去られていく悪夢の出来事を想像すると、『審判』や『収容所群島』のような凍りつく不条理な世界ですら御伽噺にみえてくるほど、個人の頭上に突然打ち下された、想像を絶する、とんでもない奇想天外の事態であった。

『収容所群島』の世界であれば、逮捕の嵐は吹き荒れていたし、いかに間違いであっても反体制分子の罪条が被せられた。なによりもスターリン体制内の出来事であり、国内問題であった。ところが、日本人の拉致被害者の場合は、逮捕などとは無縁な落ち着いたのどかな日本の状況の中で日本政府の差し金ならまだしも、隣国から伸びてきた無謀な触手によるものだから、中世や近世と異なる現代に起こったこと自体が前代未聞の出来事であった。『審判』や『収容所群島』の世界と共通しているのは、拉致被害者が成人の日本人なら誰でもよいという点であった。共通していなかったのは、海をはるばる越えてきた点であった。スターリニズム国家が自国民を拉致する全体主義体制であることは白日の下に晒されていたが、今回の「日本人拉致事件」によって、必要とあらばその全体主義体制は他国の国民にまで及ぼされるものであることをも明らかにしたのである。同時に、理由なく逮捕される不条理さが条理と思われてくるほど、暗黒の体制に呑みこまれていく人間の闇は限りない不条理さに満ち満ちていることをも浮き彫りにしていた。

2002年11月10日記